

このところ海外での活躍がきわだつ隈研吾氏。昨年の「ヴェニス・ビエンナーレ95」に続いて、今年春には、同じくイタリアで「ミラノ・トリエンナーレ96」(2/27~5/10)、さらにロンドンでは王立英国建築家協会(RIBA)の招待による「RIBA 96」日本の7人の建築家展」(3/25~4/16)に出展。ヨーロッパを舞台に同時期に二つ、刺激的なテーマを発表している。

ミラノ・トリエンナーレは、ご存じのように三年前に一度世界中の建築家やデザイナーが集まる、いわばデザインのアオリンピックみたいなものですけれど、今年のテーマというのが「アイデンティティとディファレンス(同一性と差異性)」で、それをうけた日本館のテーマが「パブリックボディ・イン・クラインス(危機の中の公共的な身体)」。まあ、いろんな意味にとれる抽象的な言葉ですが、世界と日本との差異、今日本が世界に一番訴えられることは何かというところ、やはり昨年(一九九五年)というのは我々にとって、世界中がびっくりするようなところでもない体験をした年だったわけですね。阪神大震災もあったし、オウムもあった。

# 隈

[Front Line]

Kengo Kuma

An Architect

# 研吾

インタビュアー 人・車・都市、そして文化

## 建築的欲望の終焉

隈研吾(くま・けんご) — 建築家/隈研吾建築都市設計事務所代表/法政大学講師  
1954年横浜生まれ。79年東京大学建築学大学院卒。コロンビア大学設計建築都市計画学科客員研究員等を経て、87年空間研究所設立。89年隈研吾建築都市設計事務所設立。94年コロンビア大学客員教授。各種委員会、審議会の委員多数。著書多数。その建築作品で受賞多数の人気建築家である一方、さまざまな展覧会を通じて建築概念をも超越する数々のテーマに挑み続ける。

### CONTENTS

- P1 FRONT LINE  
● [インタビュアー] 人・車・都市、そして文化 ●  
隈 研吾 — 建築的欲望の終焉 —
- P6 FROM OUTSIDE  
RIBA '96  
日本の7人の建築家展
- P7 VISION  
立体駐車設備とPL法
- P9 NEW LINEUP  
● 立体駐車設備/新製品紹介 ●  
CSパーキング
- P11 ARRANGEMENT  
● 立体駐車設備/導入事例 ●  
日本橋箱崎ビル/日本橋箱崎シティハイブ  
ジャンブル・プレイス1
- P13 TREND  
災害時の危機管理  
小川和久
- P14 ANOTHER PROJECT  
● 他事業紹介/展示造形本部 ●  
「東京臨海副都心 複合展示模型」  
東京みなと館

る」という生き方自体、どうなのかなど。本当にそれでいいのかという疑問が僕の中にはあって。グラスネットの中では公園自体が、人間が生きてのために必要なすべてのものを与えてくれます。たとえば、草は全部食べられる(笑)。いろいろ調べて、人間の身体にとって必要な植物をストライプ状に植えたんです。だから僕の公園は、まず喰える公園(笑)。これは、ガウディの設計した「グエル公園」とも掛け言葉になっているのですが(笑)。それから寝泊りもできる。リニアにつながる洞穴みたいな場所を幾つもつくったんですよ。危機の後、仮設住宅みたいなあんな惨めなものをわざわざ建てて入るより、むかし大地の中で眠っていた頃のような、原始的な心地よさになる(笑)。

通じるような場所で僕は眠ってみたいと思って。それに、イザというときに備えて川の水を浄化する設備もつくりましたから、川の水だって飲める。

そこで着る服も考えた。その服は、つまりグラスネットというインフラと人間とのインターフェイスというわけです。三宅一先生さんのところの津村耕佑さんというデザイナーが考えた「ファイナルホーム」、つまり最終的な家という名の洋服があったので、その彼に協力してもらいました。最後に人間は、それさえあれば生きていけるという衣服(家)です。トリエンナーレではそれをさらに改良して、「ファイナルホーム・スーパード・クロス」として提案しました。それを着て僕の公園にいれば、たとえ今あるインフラがズタズタになっても、一応の生活がそこで完結できる。

でも、そこにはランドスケープがあるだけです。通常の建築概念でいえば、建築ではない。しかし僕は、今までの都市空間とか建築というハードウェアがなくても、人間は生きていけるのではないかと思っていて、その可能性を考えたんです。



建築作品で多数受賞した人気建築家の一人。しかし自身は、自らの活動をその世界だけに限定していない。むしろ展覧会ははじめ、さまざまなメディアを発表の場として捉え、テーマを追求し続ける。

一方、ロンドンのRIBAは、こちらの展覧会は全部CD-ROMになっただけで、僕たちはそれぞれの中でサイバースペースを組み立て、それにアクセスしてもらおうという趣向。

つまり……、これは建築に対する基本的な考え方も絡む問題なんですけれど、僕は、建築は「重すぎる」と思っているんです。どうも今の時代にはそぐわなくなってきたんじゃないかと。今は何もかもがすごい速さで移動する時代です。またサイバースペースみたいなものが現実存在するわけで、そこでは膨大な情報があるのに、瞬間に行き来する。ところが建築は1ミリの移動すらできず、ものすごく重たい。つくる時間も相当かかり、大きいものだと十年かかって、やっと。完成した時には時代がすっかり変わっていたなんてことはいくらでもある(笑)。

建築家はむしろ「環境をトータルに考える人」と言い換えた方がいい。



# しかし僕は、今までの都市空間とか建築の中だけでなくても、人間は生きていけるのではないかと。

ですから「そういう建築の重さをどうしたら消していけるか」というのが、最近の僕のテーマなんです。また、その意味では展覧会というのは、パッと企画してパッと見てもいい、そしてすぐまた消えてしまうものだから、そのテナティブな性格が今の時代にはピッタリ合っている。むしろ建築家は、建築作品を通じて世の中の人に何かを訴えるより、展覧会で訴えた方が実は面白いことが伝えられるんじゃないかと。

トリエンナーレとRIBAのコンセプトは、見てのとおりまったく別です。しかしどちらも、根底にある考えは同じだった。つまり、今の建築のような重たいものではない、何かオルタナティブ・ワールドみたいなものを僕は創り出したかった。それは、建築の今後を考えていく上で、ものすごく大事なオプションだとも思うしね。

とはいえ、建築家にとって建築物をつくるのが重要な仕事であることは、今も変わらない。氏自身、今という時代を見据えながら、真摯に建築と取り組む。またその姿勢ゆえか、施主の評価もすこぶるいい。しかし、世の常として、クライアントの望みと建築家の考え

とは必ずしも一致しない。が、その難局を自身はこう捉える。

両方から怒られそうですが、クライアントと女性は「似てる」と思っています、僕は（笑）。一貫性

そうした不条理な言葉の中に社会の大きな流れの変化が投影されていると思うんですよ。そして彼ら、彼女らは何かその変化を微妙に感じ取り、それで僕にそんなことを

下げてしまったらロクなものではないよ」と、僕だって腹が立つ。でも、その場では、決して否定しない。そうした不条理な台詞の中にも、実は「今の時代にそんなカ

ンテンションがあるのか、それを一晩でも二晩でもジックリ考える。関係を壊すのはとても簡単ですが、そうではなくて、じゃあどうすれば相手との間にハッピーな環境がつけられるだろうか、と懸命に考える。それは必ず見付けられるものだと思うし、それにやはり、その人の前ではその人だけに全力を尽くすべきでしょう（笑）。

だから、僕はそうやって女性と付き合うし、クライアントに対してもまったくそれは同じです。その「言える強さ」が限研吾らしさであり、魅力のひとつでもある。内包するテーマを作品の中に表現するだけでなく、建築の世界そのものに対しては鋭く明確に、言葉をもってさまざま提言している。

僕は、書くのも建築も同じだと思っているんですよ。無限のチョイスがあるわけですが、どちらにもたとえばここに何かを建てようと思えば、透明なガラス張りでもコンクリートの打ちっぱなしでも、選択肢はいくらでもある。一方、それを批判しようとするれば、そのやり方もいくらだってある。透明な建物だったら「重厚さが無い」という言い方ができるだろうし、逆に重厚なものだったら「重たく



が無いというか、すぐ気が変わるし、合理的なことを言う一方で、ものすごく不合理なことも平気で言ってくる（笑）。だけど僕は、それを否定しない。というのは、

言ってくるんじゃないかと。もちろん、頭の中ではカットとなるんですよ（笑）。たとえば、クライアントが「もっとコストを下げたい」と言ってきたら、「そこまで

ネをかけた建築はいらない」というような、何か建築に対する世の中のニーズの変化があらわれているのではないかと……。だから一旦は収め、その中にどんな深いイ

て時代に合わない」と言えはいい。要するに、何とでも言える。

だから基本的には僕は、批判をまったく恐れない。大事なものは、なにしろ一つつくってみることで、それから、最終的にはやはり、それを正当化するのは志だと思えばもう……。どこで何を言っても、どんなものをつくっても、恐れるものは何もない（笑）。

それに「発言する」ということ例えば、建築家は、思い切ったことを自分の作品の中だけで表現するのではなく、制度に対しても言わなければ絶対ダメだと思えますよ。ご存じのとおり、建築の問題点というのは、実は制度からきている部分が多く多いわけですから。そして今は、言う絶好のチャンス。「そろそろ変えなきゃダメだ」と、ほぼ全員が思っているんですから。

というのも、実は昨年「日本経済新聞」にコラムを連載したんですけれど、そのときに僕は制度のこととちやんと言った方がいいと思ったので、建築基準法の悪口などいろいろな書いたんですよ。しかも、できるだけ具体的に。そして何が起きたかという、建設省が僕を呼んで「もっと聞きたい」と。

そういうことを書く建設省の役人に睨まれるんじゃないかと、なかにはそれを恐れる建築家の方もいらっしやるかもしれないが、しかしそうではない。逆に僕が驚いたのは、むしろ建設省の方が僕たち建築家よりも、より危機感をもっていて、さらにダイナミックな改革の原案まで既につくっていた。反対に、彼らは建築家に

対して「誰も何も言っていない」「建築家が何を考えているのかサッパリわからない」と。そしてその意味では、彼らは「建築家というものは制度には関心のない、自分の美的作品だけを残したがっている芸術的な人たち」という見方をしていた。我々にとって、それはすごいマイナスですよ。

永劫不変の真実など無い——と氏は言う。森羅万象においてその考え方は一貫している。また、だからこそ時代ごとの建築の姿、その真実を求めてやまない。

建築が重たいように、建築家の世界自体ものすごく重たい、閉じた世界だと僕は思っているんです。それが世の中との格差を大きくさせてしまった原因の一つではないかと。そして、建築がだんだん世の中から取り残されていくように、建築家の世界もこのままでは、取

り残されつつあるんじゃないかと。たとえば、丹下さんがスターだった時代というのは、日本が高度成長の時代で、建築が世の中の中心にあった時代。戦後の高度成長を支えるのが建築で、社会と建築は一体で、だからこそ彼らはスターになった。ところが今は、そうではなくなった。建築は社会と一体ではないし、建築家も世の中の中心にはいなくなってしまった。

## Front Line

建築家が社会の中心として威張っている必要は全然ないけれど、社会的状況から切斷されたところで、建築家の自分勝手な世界を築くことは、すごく大きな問題だと思えます。早く社会に建築を戻す必要はないけれど、僕は、建築家は「環境をトータルに考える人」あるいは「環境家」と言い換えた方がいいと思っているんですから、今はその環境自体がそれこそどんどん変わってきているんですから、そうなるサイバー

スペースもランドスケープも含め、環境をトータルで考えられるのはやはり建築家だろうと。また、そういう人間が、世の中に対して何も発信しないというのは困る。たとえば建築家は、なにもハードばかりつくらなくても、ランドスケープをつくっていいじゃない

いかと。日比谷公園みたいなものを一つつくれば、あそこで本を読めば図書館と呼べるわけだし、音楽を聴けばコンサートホール。その意味では最高の建築だと思われ、逆に、あれ以上の建築をつくる方が大変。

それにサイバースペースの方に溶かして行く、というやり方だっている。なにしろ今は、何か一個サイバー・ヘルメットみたいなものを被ったら、そっちの方が建築よりはるかに豊かな体験ができるかもしれないんですから（笑）。それに比べたら、むしろ建築などつくらない方がいいかもしれない。だから、そういう溶け方もある。もちろん、建築を守ろうとする人からみたら、そういう意味でも、今はすごく嫌な時代だと思います。

高度成長時代の建築家のイメージに対して最初にノーを言ったの



東京に流れる川に沿ってつくった  
グラス・ネットワーク



「ミラノ・トリエンナーレ'96」  
出展作品

# でも、基本的には、パーキングというのは公共が用意すべきインフラではないかと……。



建築は「重すぎる」と思っているんですよ。どうも今の時代にはそぐわなくなっているんじゃないかと。

あるわけで、それにそろそろ気づくはずなんです。そして、その意味では僕は、今ものすごく建築が面白い時期に来ていると思う。

最後に、あえてパーキングシステムについても伺ってみたい。「参考になるかどうか」と謙遜しながらようやく口を開いてくれた隈氏だったが、はたしてその内容は、ここでも氏ならではの哲学が伺える唆にとんだものであった。

駐車場をどうするかというの、実は意外なほど決定的に建築を決定しちゃうんですね。誰もがめぐりあう最初のオプションというものが必ずあるわけです。地上に自走式で設けるか機械式で設けるか、あるいは地下に埋め込んでしまおうかと、まず、そこを解決しないと我々は次のステップには行けない。またパーキングシステムというのは、全体の中ではいろんな意味で比重が大きいわけです。にもかかわらず、建築家が「こういうものを」という形で新しいシステムをお願いしても、それを組み上げてくれるような対応の体制は実際無いだろうと。そこがすごく残念です。

また、制度的なことに関して言うと、駐車場というのは、どんな

ものをつくるかという問題以前に、妙な安全基準みたいなものが色々あるわけです。たとえば、一番わかりやすい例がエレベーター。そこには「定期点検制度」という、車の車検以上にナンセンスと思われる世界一厳しい制度がついてまわる。そして、その結果何が起ったかというところ、この国ではマンションなどにエレベーターをつけようと思うと、メンテナンス代が共益費にはね返ってとんでもない金額になる。だから、何百軒も入居している大型マンションでもエレベーターは一台しかないということすらあって、高級マンションでもエレベーターを降りてから延々、外廊下を歩いて自分の家まで行かないやならない。でも欧米のアパートなどはエレベーターを降りると、すぐ目の前が玄関じゃないですか。それが何故、日本ではできないのか。

結局、日本では「安全基準」という名の下、普通の生活者が何かものすごい余分な負担を制度的に強いられるという場面にさまざま出くわすんですよ。もちろん、そのメンテナンスも今や企業にとつては利益とも直結しているわけですから、いろいろと難しいんです

[Front Line]

けれど……、しかし、それでは最後は自分で自分の首を絞めているのと同じ。メンテナンスコストが安くなれば、逆にエレベーターはもっと売れるし、デベロッパーだってそれをウリにして建てればもっと儲けられるはずなんです。でも基本的には、僕は、パーキングというのは公共が用意すべきインフラだと思っています。僕も車まで走ってよく感じることもなんでもありますが、駐車したいと思っても、たとえ「PARKING」と表示してあっても、実はそのビルの利用者だけに限定してあるケースが普通で、実際には利用できないパーキングがほとんどじゃないですか。また、ビルが閉まるとダメな場合も多いですから、使われてい

ないパーキング・スペースというのは、実はものすごく多い。特に、東京なんかはそう。ですからパーキングというのは、そもそも道路と同じインフラと考えています。公共がきちんと整備して、そういうことを官が積極的に進めるべきではないかと。地主がパーキングをつくって、そこからどれだけ利益を得るかという発想ではなく、パーキングは基本的に都市の施設でやるという発想。パーキングは都市の重要な構成要素だと、そして道路をつくる時には必ず駐車場もつくるという方向にそろそろ転換して行かないと、都市はもう成り立たないと僕は思う。

【主な建築作品】

- 88 伊豆の風呂小屋
- 91 マイトン島リゾートコンプレックスドリック/M2
- 92 鬼ノ城ゴルフ倶楽部
- 94 橋原町地域交流施設/亀老山展望台
- 96 ヴェニス・ビエンナーレ'95 日本館会場構成
- 95 登米町伝統芸能伝承館(予定)
- 98 本四公団淡路サービスエリア(予定)/香青町紙の博物館(予定)

【主な著書】

- 86 「10宅論」
- 87 「ニューヨーク文化案内」
- 89 「グッドバイ・ポストモダン」
- 90 「建築20世紀」共著
- 91 「システムとしての家族」
- 92 「建築リフル」
- 94 「新・建築入門」/「建築的欲望の終焉」
- 95 「建築の危機を越えて」

【主な展覧会】

- 87 東京タワープロジェクト
- 90 ラスト・ディケイド1990/第10回 金沢彫刻展/現代建築家122人展
- 91 第11回 金沢彫刻展/My Office Graffiti/Fragmental Landscape
- 92 個展「東京起柱計画」
- 93 迷宮都市/GA JAPAN LEAGUE '93展
- 94 京都未来空間美術館/GA JAPAN LEAGUE '94展/個展「新しい自然主義」/100人の素敵なおもてなし展/リビングデザインミュージアム展
- 95 個展「建築 転送の速度」/現代建築家展/木の建築と都市展/ヴェニス・ビエンナーレ'95 日本館会場構成/'96 ミラノ・トリエンナーレ'96 日本館アクティング・コミッション/RIBA: EMERGING ARCHITECTS IN JAPAN (ロンドン)

FROM OUTSIDE



RIBA展 '96

EMERGING ARCHITECTS IN JAPAN

RIBA '96 Epigenetic Scene

日本の7人の建築家展 山本 博

この春、英国でちょっと風変わりな建築展が催され、ロンドンっ子の話題となった。作品を出展したのは、RIBAから招待を受けた日本を代表する若手建築家たち7人。歴史的厚重さを色濃く残す街ロンドンで、彼らは一体何を表現したのだろう。



内容をさらにグレードアップさせたCD-ROM「THE WORKS」(日英両国語対応)が発売されました。お問い合わせは、ハートランド・03-5421-1088まで。©Focus Systems Corp.

「トゥルルルル……」 「……山本さん? 建築展をCD-ROMでできないかな……」

そこに並んでいるモニター、モニター、モニター……。一瞬場所を間違えてしまったかと思うような会場設定に、訪れた人は皆一様に驚きを隠せない。しかし、よく見るとそのモニターへの人々の接し方がおもしろい。みんなワイワイと接する人、一人黙々と没入している人、あるいは無関心を装う人……と、人さまざまである。!?、待てよ、この接し方は……。

建築を一所懸命「体験」し、建築家と語り合い、「交流」している。マウスを操作しているその人は、その建物に対してアクティブに行動しているのだ。ここでは、建物ハード無しに建築を「体験」している。これは新たな建築との対峙の方法のひとつに他ならない。

建築家は、新しい交流の方法を手にしたのだ。そう、それこそが今回のCD-ROMによる展示の意義だったのだ。

「トウルルルル……」 「……山本さん? 建築展をCD-ROMでできないかな……」

今さら言うまでもなく、建築を知るための最も近道は「体験」することである。いつも建築は、体験を通じて人に何かを語りかけてきた。だが、すべての建築を体験することは不可能であり、しかも、かつて雄弁であった建築はバブル崩壊後の現在、寡黙となり……。必要な事まで我々に伝えることを拒否しているかのように見える。しかし、建築というものは本来、人が集い、語り合う「交流」の場であつたはずだ。それを拒否した建築は……。

「交流」と「体験」だ。 また、その展示が意味するものは何だったのだろうか? キーワードは「交流」と「体験」だ。 会場に入りますと驚かされるのは、

「交流」と「体験」だ。 また、その展示が意味するものは何だったのだろうか? キーワードは「交流」と「体験」だ。 会場に入りますと驚かされるのは、

「交流」と「体験」だ。 また、その展示が意味するものは何だったのだろうか? キーワードは「交流」と「体験」だ。 会場に入りますと驚かされるのは、

建築的  
欲望の  
終焉

隈研吾

著書「建築的欲望の終焉」  
3名様

RIBA '96」公式カタログ

10名様

KENGO KUMA  
隈研吾/建築問題集

ICOMA  
1998.4.4

Macintosh&MS-Windows対応  
CD-ROM「建築問題集」  
5名様

Presents

どのプレゼントも「隈研吾先生の直筆サイン入り」という貴重なものばかり。同封の「アンケートはがき」に必要事項をご記入の上、ふるってご応募ください。



写真提供: PLANTEC